

1年間の「俳句」作りで子供が大きく成長！

札幌市立元町北小学校
齊藤 振一郎

はじめに

平成23年度、担任していた2年1組で俳句作り活動に取り組んだ。

平成20年度版の学習指導要領では「日本の伝統的な言語文化にふれる」という事が扱うべき内容として書かれている。

元々、1年1組を担当していた時から子供たちは名句百選カルタで俳句に慣れ親しんでいた。また、1年生の後半には教科書の教材で俳句作りにも取り組んでいた。

そこで2年1組の担任として持ち上がる際、俳句作りに通年で取り組もう…と考えた訳である。教科書に出ている「季節の言葉」を扱う授業と連動させるようにすれば、なかなか面白い国語の授業ができるようにも思った。

俳句作りの概略

この俳句作り活動、「10分間俳句」と「句会ライブ」から成っている。具体的には以下の通り。

- ①毎週木曜の「おたよりノート」*に俳句のタネを書くコーナーを作り、5分程度の時間を取って書かせる。俳句のタネには通し番号をつけさせる。
- ②その月の最終木曜に時間を取って俳句を作らせる。その月に書いた俳句のタネから1つ選ばせ、その月に合う季語と組み合わせて俳句にする。
- ③俳句には通し番号はつけさせず、最も気に入った作品のみ投句用紙に書いて提出させる。
- ④集まった俳句の中から10句を担当が選び、翌金曜に句会ライブを行う。句会ライブでは子供たちが自由に意見を述べ、その月の最高傑作を多数決で選ぶ。

※ 私の学級では学級通信を発行せず、子供たちにノートを用意させて教師が板書した文章（その日の出来事などに関する内容）を視写させていた。
それが「おたよりノート」である。

俳句のタネ

「俳句のタネ」は小山正見氏が著書（巻末の参考文献を参照）の中で使ってる言葉だ。同じ考え方は夏井いつき氏も著書（同巻末参照）の中で述べているが、夏井氏は「俳句の種」と表記している。両者の基本的な考え方は同じだ。俳句を以下のように作る。

季語の5音+季語とは関係のない12音＝「取り合わせ」の俳句

もちろん、季語の位置は逆になっても良い。つまり、上五（俳句の最初の5音）が季語になっても下五（同じく最後の5音）が季語になっても良い訳だ。

この「季語とは関係のない12音」を両氏は「俳句のタネ」とか「俳句の種」と呼んでいる。私は小山氏の「10分間俳句」を基本に考えているので、ここでは「俳句のタネ」で表記させていただく。

実際に実践してみると、いきなり俳句のタネを作らせるのは無理があった。文を作るのが苦手な子にとっては、たった12音でも大きなハードルとなる。

最初に行った4月7日には1つも俳句のタネができなかった子もいた。ここは更なる手立てが必要と感じ、小山氏書いている「穴埋め俳句」を応用する事にした。これは例えば、以下のような言葉を示して○の部分を考えさせるというものだ。

夏が来た○○○○○○○隅田川

これだと7音だけ考えれば良くハードルが低くなる。これを俳句のタネ作りで応用する事にした。俳句のタネ作り2回目となる4月12日。次の○の部分を考えるように指示を出した。

カルタする○○○○○○○
○○○○○○○カルタする

これでも思いつかない子がいたので例を出した。

カルタするきょうはかちたい

まるっきり同じのは認めなかったが、一文字でも違っていれば良い事とした。その結果、幾つか俳句のタネが生まれた。

カルタするあしたもかつぞ
カルタするあいてにとられた
カルタするみんなのすがた

微妙な違いの作品も多いが、それにも気持ちの違いを感じる。なかなか面白かった。3回目の4月20日も、同じように七音だけ考えさせた。出した課題は次の通り。

中にわで○○○○○○○
げんかんで○○○○○○○

もちろん、「中にわで」や「げんかんで」を最後にもってきても良い。また、「中にわに」の様に言葉を多少変えても構わないとした。

ちなみに、この日は生活科で春を探す活動をしていた。その際、玄関前や中庭で活動したので上記課題とした訳だ。

さすがに3回目（穴埋めだと2回目）なので子供たちも考えた。生活科で実際に見ていた事も大きかった。

中にわで春を見つけた
中にわでいっぱいあそぶ
中にわのつぼみがきれい
げんかんでお花見つけた
げんかんでありを見つけた
げんかんにお花がいっぱい
げんかんのちかくの花の
げんかんのちかくに花が

ここまでで、どの子も最低1つは俳句のタネを作る事ができた。

なお、この様な穴埋めが必要だったのは最初だけ。徐々に作り方にも慣れてきて、1学期の後半には何も言わなくても俳句のタネを作れるようになった。

実際の句作

この様にして俳句のタネを書きためていき、月末には俳句作りを行う。では、どうやって俳句作りをさせたか…5月の様子を紹介する。

ただし、録音し忘れたので写真を見ての再現である。実際とは、多少違っている部分がある。また、個人名は仮名とさせていただいた。

子供たちが「春がいっぱい」を読んでいる間に板書する。

教科書に出ている季節の言葉を三音、四音、五音に分けて板書した。

齊藤「これ、どういう分け方で三つに分かれているか…判る人？」

A 「文字が三つ、四つ、五つになっている仲間です」

齊藤「正しくは文字の数じゃなくて、音の数だけど、OKです」

それぞれを読んで音数を確認する。

齊藤「ところで、こういう三音や四音の言葉を俳句に使いたい時、五音じゃないから困るよね。

そこで、俳句には便利なものがあります」

「切れ字」と板書する。

範読した後、子供たちにも追い読みで読ませる。

齊藤「例えば、こういう俳句」

「ふるいけやかわずとびこむ水の音」と板書する。

齊藤「『ふるいけや』は何音？」

子供「五音」

齊藤「『蛙飛び込む』」

子供「七音」

齊藤「『水の音』」

子供「五音」

音数を板書する。

齊藤「この『ふるいけや』は漢字で書くと『古池や』となります」

板書して古池を説明する。

齊藤「『古池』だと四音しかない。そこで『や』という切れ字を使って五音にした訳です」

最初に板書した四音グループの言葉に「や」を書き足していく。

齊藤「四音の言葉も、こうやって切れ字を使うと五音になるね」

三音グループには「かな」を書き足す。

齊藤「三音の言葉には『かな』という切れ字をつけると五音になる。

ただし、これだと最後の方しかつけられないけどね」

「切れ字」について言えば、この説明は不十分。何故なら、「切れ字」には音数の調整以外にも様々な機能があるからだ。

しかし、一度に全部説明しても子供たちは混乱してしまう。だから、ここでは子供たちに最も判りやすい部分だけ教えている。

国語のノートを開かせ日付などを書かせる。「おたよりノート」も開かせる。

齊藤「前回は四月の末に行っているの、今回は五月の『おたよりノート』に書いた『俳句のタネ』

を使います」

例として、齊藤のノートに書いてあった⑧～⑮の「俳句のタネ」を板書する。

齊藤「例えば、⑬と『つくし』を使いたいとします。すると、こんな感じになります」

「キャラベンを見せあうなかまつくしかな」と板書する。

齊藤「あるいは、⑮だとうなります」

「みつばちやおべんとう外だとうまい」と板書する。

子供たちと一斉読みで読む。

齊藤「何か変だね」

子供「音の数が五五七になってる」

齊藤「その通り。そう言う時は、こうやって入れ替えちゃえばイイんだよ」

「おべんとう」と「外だとうまい」を入れ替えるように板書する。

子供たちに読ませて確認する。

齊藤「じゃ、さっそく俳句を作ってみましょう」

この後、作った俳句を国語のノートに書かせていく。

困っている子に対しては机間巡視をしながら個別指導を入れた。

齊藤「幾つか書けた人は、その中から一番イイな…というのを選んで短冊に書きます」

余り色画用紙の短冊に鉛筆で書かせて提出させた。

ここまで約15分。

ちなみに、こういう丁寧な指導は1学期だけ。2学期からは季節の言葉（季語）を提示するだけで俳句を作る事ができるようになった。

句会ライブ

こうやって俳句を作ったら、いよいよ「句会ライブ」だ。

投句用紙代わりの短冊に書かせた俳句から決勝に進出する10句を選ぶ。それを黒板に提示し、子供たちが自由に意見を述べ合い、多数決で最も良いと思われる俳句を選ぶのが句会ライブだ。

夏井いつき氏が行っている句会ライブでは、決勝に進出した10句の他に特別賞などの入選句がある。それは、私の実践ではカットした。夏井氏の実践は学年や学校単位で行われる事が多く母数が大きい。それに対し、私は自分の学級単位なので母数が小さい。それが、特別賞をカットした理由だ。

もっとも、2年生なので決勝進出10句に残っただけでは十分に盛り上がれない子もいる。だから、決勝進出10句の子には特別賞的な賞状を全員に渡した。

1年間での成長

この様に1年間取り組んで最も感じたのが子供たちの成長である。

例として1人紹介する。どちらかと言えば、国語は全般的に（つまり5領域全部）苦手で、特に作文を苦手としている子の作品である。なお、最初に書かれている「4月」などは俳句を作った月を意味している。

- | | |
|-----|---------------------|
| 4月 | げんかんのとなりに車がいたチューリップ |
| 5月 | かるたする人たのしいよつくしかな |
| 6月 | なつ入るてつぼうにんじゃたのしいな |
| 7月 | ムースさわれてうれしかったせみのこえ |
| 8月 | なつの空こうちょうせんせい本をよむ |
| 9月 | たんけんでつかれたですよあき立ちぬ |
| 10月 | アナウンスとてもどきどき秋の声 |

11月	本日はさんかんぴです秋日和
12月	あそびランドたのしかったよ山ねむる
2月	スキーしておもしろかったスキー山
3月	六年生おわかれだよね春の朝

これを見ると、1学期に作った俳句は「何じゃこりゃ」的な作品が多い。それが、俳句作りを続ける中でどんどん俳句の形になってきた。そして、2学期後半から3学期の俳句だと、「お〜いお茶」の「新俳句大賞」に応募しても良いくらいの作品になっている。

正に「継続は力なり」。1年間の取り組みで子供たちは大きく成長した。

ここでは俳句を作る力を見てもらったが、仲間の俳句に対して意見を述べる力も成長したと思う。4月は単に好き嫌いだけが述べられていたが、3月ともなると俳句の意味や情景について説明する意見が増えていたからだ。

今後の課題

今後の課題は教科書との関連性。

最初の頃、教科書の「季節の言葉」に出てくる言葉を季語として使わせていた。教科書とのつながりを重視したからだ。

しかし、2年生の「季節の言葉」は「つくし」「なの花」「ふきのとう」など具体物の名前が多い。そのため、俳句のタネと合わせた時に意味が変になってしまう事が多々あった。

この問題を解決するにはどうしたら良いか…2学期の中頃には自分なりの結論を出した。「季節の言葉」からは使える言葉だけ使おう。それ以外は、例えば「冬の空」や「春の風」など担任の方で選んだ季語を与えよう…という結論だ。

ただ、学年が変われば使える言葉も増えてくるだろう。だから、この課題は今後も検討し続けていきたい。

【参考文献】

- ① 小山正見『発見！感動！創造！どの子どもでもできる10分間俳句』学事出版
- ② 日本俳句教育研究会 三浦和尚 夏井いつき 編著
『俳句の授業ができる本 創作指導ハンドブック』三省堂

参考文献と言うよりは、ほとんど追試させていただいたのが上記2冊。「10分間俳句」は①が、「句会ライブ」は②がタネ本となっている。